第69回の歴史散歩は少し遠出をして松江の歴史を訪ねてみます。

今では外資系企業を中心とした工場が集まる工業都市、また華東師範大学などの大学が集まる学園都市の松江ですが、古くは呉・越の時代まで遡ることができる長い歴史を持った街でもあります。

「江南」と言えば「豊かな水田地帯」 という風景を思い浮かべますが、松江 の特色は明代以降稲作から綿花栽培 に切り替わったこと、それにより綿糸、 綿布の一大生産地として発展したこ とにあります。本文中で中村貴さんと 東修平さんが解説してくれています が、これは太湖から海へ流れる河流が 変わったことによるもので、唐代には 「蘇湖熟すれば天下足る」(蘇州と湖 州が豊作であれば天下の食料は足り

る)と言われていたものが、明代以降



は「湖広熟すれば天下足る」(湖北湖 南が豊作であれば天下の食料は足り る)と言われるように、稲作の中心地 が長江下流域(長江デルタ)から長江 中流域に移り、太湖南岸の松江、湖州 (松江の西方にある街)は稲作から綿 花=綿布(松江)、桑=養蚕(湖州) へと変わって行きました。

それは、松江の経済がコメを作る「農業」から、綿布という「商品」を生産・販売する「商工業」へと変わって行ったということでもあります。

紡績業の発展と江南の米を北方へ送 る漕運業の発達により、松江は明代、 清代には蘇州と並ぶ商工業都市とな り「蘇松財賦半天下」(蘇州と松江の 財貨と納税額は天下の半分を占める) と言われるほどに繁栄しました。

また、松江産の綿布は「南京木綿」の 名称で明代から日本へも輸出されて おり、明末には 2000 万匹 (当時の松 江綿布の総生産量の 9 割に相当)に上 ったという記録があります。松江は明 代から日本と深いかかわりのある街 でもあります。

今回はそのような往時の松江の繁栄 を偲ばせる方塔園と清真寺、大倉橋か ら秀南橋にかけての運河と旧市街を 散策します。

また、松江を始め江南一帯の治水を行ったとされる春申君の祠堂を訪れ、古代の江南の歴史を研究されている中村貴さんから春申君に関するお話をうかがうという「特別講義」も用意しております。

今回の資料は、春申君に関しては中村 貴さん、松江の歴史に関しては東修平

さん、方塔園と旧市街に関しては山本和夫さん、清真寺に関しては成田恵美子がそれぞれ詳しい解説を書いて下さいました。

上海の歴史というとアヘン戦争以降 の租界の歴史しか無いように思われ がちですが、上海(県)を含んでいた松 江(府)の歴史を知れば、上海の歴史に 対する見方も少し変わってくると思 います。

添付の資料をじっくり読み込んで松 江を散歩すれば、明日から江南の歴史 通になること請け合いです!

お天気が少々心配ですが、楽しい勉強 会になることを期待しています。

(上海歴史散歩の会・代表 成田義光)



(1ページ目写真「春申君祠堂」・2ページ目写真「1960年代前後の旧松江府城外」)

【散歩のご案内】

■開催日時

行

8:00 集合·受付開始

守にてご協力お願いします。

午前8:15 散歩出発(バス移動) 午後5:30 蕎麦処紋兵衛・宋園 は、別途参加費をご相談 路店(上海市長寧区宋園路 79号 (宋園路×古羊路)) 前帰着・解

散

■集合場所

2014年6月22日(日) ※兩天決 地下鉄2号線・淞虹路駅4号出口 東 修平

■参加費

お一人 150 元

※パス移動のため、集合時間は厳
※交通費・昼食代・施設入場料含
■その他

※高校生以下の方につきまして

■ご連絡先

azuma. s@donghua-sh. com

(139-1891-4366)

※春申君祠堂の見学環境(カビが 多い)の関係上、ご必要な方はマ スク持参をお願いします。

※午後に清真寺訪問のため、昼食 時のお飲物はビール等のアルコ ール類はありません。

※清真寺訪問のため、サンダル、 肌を露出した服装の着用はご遠 慮下さい。

【散歩ルートのご案内】(インターネット「ウィキペディア」・松江区地図(中華地図学社/2014年より)

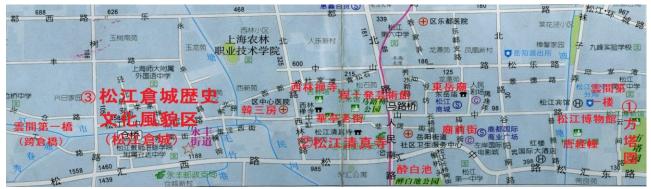
松江区の位置図



春申君祠堂と松江旧市街の位置図



松江旧市街の位置図



(①歴史解説編)

一、上海前史

1. "ヒストリー"のなか の "ストーリー"

上海と聞いて何を思い浮 かべるだろうか。中国の経 済・金融の中心地、あるい は外灘・豫園などの観光地 を擁する観光都市、さらに は"魔都"と称された租界 時代などが多いのではない だろうか。1842 年に开埠 (開港) して以来、上海は 江南地域における対外交易 の中心地として大きな発展 を遂げ、その地理的特徴か ら"海纳百川"(国内外の 様々な文化要素を取り入れ 吸収すること)とよばれる 開放性を有し、人・モノ・ 情報が集まり、"海派文化" と呼ばれる独特の文化を形 成した。このことが、人々 に様々な"近代上海"のイ メージを想起させる主要な 要因となったのだろう。

では、近代以前の上海の 姿とはどのようなものであったのだろうか。そもそも 上海はどのように形成されたのだろうか。このような "古代上海"に関する事柄は、ガイドブックや上海史の説明において断片的に記 されるだけで、その発祥か ら近現代までの歴史につい て、知る機会は思いのほか 少ない。

厳密な歴史考証の立場 からすると、上海の発祥は 唐の天宝 10 年 (751 年) の 華亭県の設置から始まり、 宋代の上海鎮誕生から、元 代における松江府の設置と 上海県の成立へと続いてい

春秋	呉
戦国	越、楚
秦、漢	海塩、婁県
唐	華亭県
宋	上海鎮
元	上海県
1927	上海特別市
1930 年	上海市

■上海の古今地名対照表

本来歴史とは、"history"に"story"と言う言葉が含まれるように、歴史的事実に対している。歴代の人々の思いが込められている。漢代の司馬では"始皇帝暗殺"や"項羽と劉邦"の故事などのように、働作されたものも含まれている。つまり継が

れる歴史というのは、たんに事実の羅列のみで構成されるのではなく、そこに人々の思いが込められてはじめて後代へ伝承され、そこに歴史のロマンや人々を引きつける醍醐味が生まれることになる。

上海の歴史、そして"上 海之根"(上海発祥の地)と いわれる松江の歴史も、そ の発祥から発展にまつわる 歴史において、いくつもの 伝説が残されている。ここ で取り上げるのは、松江・ 上海の発祥についての伝説 で、"申城"(上海の別称) と"黄浦江"(上海の南北を 貫く大河) に関係するもの である。この二つの言葉に は、松江・上海発祥の背景 とそれに深くかかわった、 ある歴史上の人物が関係し ている。その人物の名を春 申君という。

2. 春申君とは?



■春申君

春申君(生年不祥—紀元 前 238 年) は、姓を黄、名 を歇(あつ)といい、戦国 末期(紀元前3世紀頃)の 人物で、楚国(現在の湖北・ 湖南省あたり)の宰相とし て政治の実権を握っていた 人物である。彼は斉の孟嘗 君・魏の信陵君・趙の平原 君と共に、"戦国の四君子" と称され、その名が後世ま で人口に膾炙した人物であ った。紀元前248年、春申 君黄歇は、楚の考烈王に領 地の改封を願い出て、淮河 の北の領地(淮北十二県) から"呉墟"へと移った。 "呉墟"とは春秋時代に呉 の国が治めた現江蘇省蘇州 市を中心とした地域である。

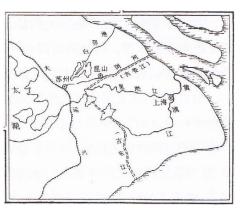
ここにおいて、春申君は 当地にて市場の開設や糧食 の管理などを行い、その貢

献によって当地の人々から 城隍神(土地神、当地の発 展に貢献した人物も神とし て奉られる)として祭られ ることとなった。ちなみに、 蘇州市に現存する城隍廟の 第一神は春申君である。こ のほかに、春申君について は次のような伝説が残され ている。それは、彼が水利 事業を行い、ある大河を開 鑿したというものである。 後世の人々は、彼にちな んでこの大河を"春申浦" あるいは"黄浦江"(黄は 春申君の姓)と呼んだ。

3. "黄浦江"・"申城" と春申君

清代の書物である『江 南経略』(巻一下"黄浦考") には、

よって開かれ、当地の人々はそれを"黄浦"・"春申浦"と呼んでいたと記している。春申君が行ったと伝えられる水利事業は、江蘇省南部の太湖流域の水利体系と関係している。本来、長江の南方に位置する地域(三江南地区)の発展は水利によってもたらされた。



■太湖水系と黄浦江

春申君の水利関連の遺跡は黄埠墩(現江蘇省無錫市)や申港、黄田港(ともに現江蘇省江陰市)などがあり、それ以外の春申君関連の史跡を含めると蘇州・無錫・江陰・常州・湖州・上海など複数の地域に及び、この人物が残した足跡とその伝説を求める事ができる。

また、水利とその伝説に ついていえば、それは江南 地区の自然条件との関わり にふれなければならない。 江南といえば水郷・古鎮・ 園林などが思い浮かぶが、 それらはいずれも豊富な水 資源に支えられている。そ の水源となるのが、江蘇省 南部に位置した太湖とその 水系である。古代、太湖か ら海への排水は淞江(呉淞 江)・東江・婁江という三つ の大河によって行われてい たが、長江下流の土砂の堆 積から海岸線が伸長し、宋 代以降は東江・婁江は詰ま り、呉淞江も川幅が狭くな るなど、土砂を取り除くな どして河を開通させる処置 が必要であった。

つまり、江南地域の水源 である太湖からの水流は、 時として旱魃や水害などに よって江南の人々に害を与 えるがゆえに、歴代におい て堤防の建設や、運河の開 鑿などの水利が極めて重要 な意味をもっていたのであ る。

ここにおいて、江南地区 における春申君伝説は、太 湖水系の治水を行った人物 として、治水事地 して、といるで、春申君を記念しての人々が、存りである。さきほどに たわけである。さきほどの たわけである。文もその たわける治 で、松江地区における治 水の貢献によって、春申君 の名は"黄浦江"という大 河の名前に残されている。

黄浦江が歴史の表舞台に 表れるのは、実は明代に夏 原吉という人物が呉淞江を 黄浦江と合流させ、黄浦江 が太湖の水を海へ排出する 主流となってからである。 その後、黄浦江は上海の発 展を支える"母亲河"(母な る河)となり、その河を開 鑿したと伝えられる春申君 は、上海の"开山鼻祖"(開 祖)として人々の間に記憶 された。ここから、松江・ 上海も春申君の領地の一部 という言い伝えが生まれ、 上海の別称として"申城" (春申君の都邑〔=領地〕) という言葉が用いられるよ うになったのである。

 (滬)"=上海となったという。また、上海というのは "海上(海の上[ほとり])" を意味するのと同時に、そのむかし呉淞江の河口にあった"上海浦"という小河 に由来するともいわれる。

4. 春申君祠堂について



■春申君祠堂

松江区新橋鎮春申村は、春 申君が大河の開鑿を行った 際に、"指揮所"(司令部) をおいた場所との言い伝え がある。この村には現在で も、

啷啷啷 啷啷啷 爷娘去开黄浦江 回来又开春申塘 领头大爷春申君 住在伲村黄泥浜

という民謡が伝わっている。 そのなかで、春申君は黄浦 江の開鑿のほかに、春申村 付近にある春申塘(=堤) をつくった人物と詠われて いるように、現地人にとっ ては、春申君は運河を開き 人々の生活に恩恵をもたら した人物として記憶されて いる。

春申君祠堂は、この春申村のはずれに 2002 年に建立れた。四方を河に囲まれた 500 ㎡の敷地内には 江南地域の伝統的り、そのには 屋地があり、近代にしたの古代から近関連いるの古代から展開されている最奥の部とは、東東の部を重する。 中央には、中央には、中央にはが飾られている。



■春申君祠堂の最奥にある祭壇

祠堂の開放当初は、地元 住民や観光客などで賑わっ たものの、現在では案内の 看板さえなく閑散としてい る。また、室内のパネルは 色褪せ、壁画はカビだらけ であり、松江の歴史につい ての簡単な理解には役立つ かもしれないが、取り立て て価値のあるものはない。 ただ、この祠堂でほとんど 唯一の見所となっているの が、"上海之根"と題された 壁画である。



■ "上海之根"

この壁画は、長さ41m、幅6mの大型壁画で、"上海之根"(=上海発祥の地)である松江の歴史について、各時代を代表する人物や出来事を彫刻で表したものである。具体的には、

- "呉王狩猟"
- "陸氏文賦"
- "松江織造"
- "董公賞画"
- "倉城漕運"
- "九峰三泖"

という六つのテーマからなっている(当日説明あり)。 春申君祠堂は、現在では地元の古老や一部の好事家のみが通う"隠れスポット"となったが、管理人の話しによれば、現在修復工事の申請中のようで、近い将来、内装工事を施した形で開 する予定だそうである。松 江の歴史を紹介する場所と して生まれ変わることを願 いたい。

5. 唐代以前の松江の歴史

以上、春申君と松江・上 海の関係にで唐代以前の松 にで唐代以前の歴史につが、この歴史につが、こまず4. におきたい。まず4. にのの歴史につが4. にの所では、上海之根でいたがある石神には中国には中国には中国には中国には中国には中国できない。 は、これのののでは、これのののでは、これのののでは、これののでは、これののでは、これののでは、これののでは、これののでは、これののでは、これののでは、これののでは、これののでは、これの

『松江は昔華亭と呼ばれ ていた。戦国時代に春申君 黄歇が東江を浚いとおした ことから後世の人が彼のこ とを記念するため黄浦と改 称された。三国時代の将軍 陸遜は蜀との戦いに功績が あったため、華亭侯という 称号が与えられた。唐の時 代天宝十年に華亭県が設置 され今の上海市の全部を管 轄していた。華亭県の建県 1250 周年に当たる 2002 年 に松江人が歴史長編を創作 し、建県 1250 年周年の贈物 とした。よってここにしる しこれを記念する。』また、

新石器時代から現代までの 松江の変遷は、下のような 年表で示されるだろう。

唐代以前の松江は、一つ の行政単位として独立して おらず、各時代において特 定の地域の一部として存在 していた。ただ、1958年に 松江地区で広富林文化とい う約 4000 年前の新石器晩 期の遺跡が発掘されたよう に、この地域では太古から 既に文化の萌芽が現われて いた。つまり、豊富な水源 を有する松江地区の地理的 特徴は、後世において"魚 米之郷"(肥沃な平原で農水 産物に恵まれた土地)と称 され、また交通の要衝とし て交易の中心地となる基盤 を備えていたのである。

新石器	広富林文化
春秋	呉
戦国	越、楚
秦	会稽郡
後漢	呉郡
三国	呉
東晋	呉国
南北朝	呉郡
唐	華亭県
清	婁県
1912 年	華亭県
1914年	松江県

1998 年 松江区

■松江の古今地名対照表 上述してきた事柄は、上 海・松江に関する発祥の伝 説とその背景であったが、

説とその背景であったが、 次にいよいよ松江が歴史の 表舞台に登場する唐代の紹 介へと進む。

(本稿 文・中村 貴)

(参考文献)

吳貴芳『古代上海述略』上 海教育出版社 1980 年 田島英一『上海一大陸精神

田島英一『上海一大陸精神 と海洋精神の融合炉』PHP 新書 2004 年

陳傑『実証上海史:考古学 視野下的古代上海』上海古 籍出版社 2010 年



■雍正八年(1730年)の 松江府(赤の境界部分)

二、松江府の歴史 1. 松江府とは

松江府とは元代に設立した行政区画を指し、上海歴史・文化の源として"先有松江府、後有上海灘"(先に松江府あり、後に上海灘あり)とも言われる。

松江府地区に最初に出現した池城は南武城だとされる。漢代の《漢書·地理志》及び《越絶書》の記載では、伝説によると春秋末期の呉王闔閭が筑南武を築城したとされ、"鄔城"あるいは"鴻城"とも呼ばれ、その位置は現在の閔行区紀王鎮西南とされる。

松江府地区はその後行政 区画としては吴郡(現在の 蘇州・杭州含む)、秀州(現 在の嘉興地区含む)、南直 隶(現在の南京地区含む)、 江蘇省、そして 1958 年に今 日の上海市に属することに なる。

松江府の地域としては、 現在の上海蘇州河以南地区 を指す。なお、松江府の府 治(衙門)は現在の松江区 中山街道松江二中附近に所 在した(現在、跡地には元 代創建の雲間第一楼が修復 されている)。



■雲間第一楼

2. 唐・宋代の華亭県成立

唐の時代、松江府地区は 経済発展の基礎の段階であったが、宋代にかけて域内 の市・鎮の数が増加するに したがい、その発展状況や 市・鎮内の様子が文字資料 として記載されるようにな る。

唐代天保10年(751年)、 吴郡太守趙居貞により現・ 昆山南境、嘉興東境、海塩 北境に華亭県が設置され、 松江府地区は華亭県に属 の県城内に置かれた県で の所在地は、現在の松江府地 の所在地は、現在の松江の 中山街道付近とされる。こ の華亭県設置は松江府地区 が社会的・経済的に発展する る契機となる。

 建物は多く見られない。華亭 城が海辺に建ったのは、あ るいは(外敵からの)守備の 為であったのかもしれない。 紹興乙亥年(1155年)、酒務 (酒を管理する役人)が土を 掘ったところ唐代の燕胄の 妻・朱氏の墓碑を発見した が、それには咸通八年(867 年)華亭県城の西一里にこ の碑を埋めて、その郷を修 竹と名付けたと記されていた。 これが唐の置県した際の固 有の城(華亭県城)である。 勃興と荒廃の原因は良く分 からないが、(城の)境界は 大体が識別できる。県城の 周囲は 160 丈(約 530 メート ル)、(城壁の)高さは1丈2 尺(約4メートル)、厚さは9 尺5寸(約3メートル)であ る。)と記されている。



■陀羅尼経幢 (唐経幢)

また、唐大中13年(859年)、東京、唐大中13年(859年)、東京県城内に創建された陀羅尼経幢(唐経幢)の題記の中に「立于通衢」(大通りを建設する)の文字があり、このことは当りが存在していたこと説明している1962年の修復時、経幢の地下約1.5mから、南北方向に向かって青条石により舗装された道路が良好な見された。



■青龍鎮に残る青龍寺

 等とともに、しだいに内外 貿易の主要集散地としての 地位を占めることになる。 また、宋代には市舶司(海 上対外貿易の管府)が設置 され、南洋、日本、新羅等 の商人が毎年交易のために この港を訪れた。



■脱穀の風景

南宋の時代、北方の戦乱 を避けて多数の人々が江南 地域へ移住したが、それに 伴いこの地域に中原の先進 的な農業技術が導入され、 さらに農地の開発が進むこ とになる。

松江府地区でも沼地や農地が開墾され、さらに朝鮮原産の黄粒米やベトナム原産の占城米などの優良品種が導入された結果、農業生産高が飛躍的に増加した。明代の《傍秋亭雑記》の記載によれば、宋紹熙年間

(1190~1194年)、松江府地区の水田一反で三石の米が収穫されたとあり(一般的に一反で一石の収穫)、当時としては全国最高の米の生産高を誇った。



■興聖教寺の方塔(現・方塔 園内)

農業生産高の急速な増長 に伴い、松江府地区でも人 口が急激に増加し、《雲間 誌》の記載によれば、特に 宋代華亭県城の人口密度は 高く、10万戸に達したとし 。県城内の施設として は寺廟 46座(興聖教寺、 間接待院(現・西林禅寺) 等)、橋梁 39座の他、 南経の管理機関、の官 理機関がの中心 を を の中心都市として 機能を果たすようになる。

3. 元代の松江府成立

1275年、南宋に進軍した 元軍は華亭県城を包囲し、 県城守備軍は遂に投降した。 元世フビライは元至元14 年(1277年)、華亭県を華亭 府に昇格させ、県城占拠に 功労のあった沙全を府のダ ルガチ(最高統治長官)とし て任命した。さらに翌年、 華亭府は松江府と改められ、 ここに松江府が正式に成立 した。



■清真寺



■上海文廟(元代上海県成立 後に創建)

唐宋代の経済発展の結果、 元代の松江府下には合計 22の鎮、市が形成されたが、 特に至元28年(1291年) 鎮から県に昇格した上海の 発展をここで紹介しましょ う。

唐代に貿易港として栄え た青龍鎮は、南宋紹興年間 (1131~1162年)、呉淞江航 道の水深が浅くなったため、 貿易港としての機能維持が 困難となり、その地位を近 隣の南翔鎮などに譲ること になる。さらに 12 世紀から 13世紀にかけて、長江主流 が南側へ移動するに伴い、 呉淞江下流南岸の上海浦が 海上貿易港として注目され ることになる。南宋末年に はここに正式に上海鎮が設 置され、官方記録の中に初 めて"上海"の名称が登場 する。

上海鎮には市舶司が置かれ、また日本・高麗・アラビア及び東南アジアから多数の貿易船が訪れ、宋元朝の輸出商品(シルク製品、陶磁器、漆器、茶葉等)と海外輸入商品(香料、薬材、染料、木材等)が交易され、上海は中国東南沿海部の重要貿易港としての地位を確立した。



■黄道婆

13世紀末の元代には長 江下流域に綿花栽培が普及 を始めており、松江府下で も綿花栽培が盛んに行われ ていた。しかしながら当時 紡績技術の面では後れをと っていた。

黄道婆(约 1245~1330 年) は松江府鳥泥涇(現・徐 匯区華涇鎮)の一貧困農家 に生まれたが、幼いとき"童 养媳"(若くして他家に売られ、 成人するとその他家の嫁と なる)となり、そこで虐待を受 け続けたため、上海から出 る船舶に身を潜めて崖州 (現海南島)へと逃れた。ま た彼女はそこで現地の黎族 から綿紡績技術を学び、そ の後鳥泥涇に戻った彼女は その経験を生かして紡車な ど生産工具に改良を加え、 さらに先進的な紡績技術を 普及したため、松江府下の

綿紡績業の生産効率が急速 に高まり、この産業におい ても松江府は全国でも高い 地位を得ることにつながっ た。

4. 明代前期の松江府城成立

元末、紅巾の乱が勃発す る中、泰州白駒場(現・江蘇 省大豊市)の一塩運搬工で あった張士誠は自ら誠王と 称して反元の兵を挙げた。 1356年、張士誠は松江府城 を占拠し、防衛を固めるた め府城周辺に土の城壁を築 いた。反元のもう一派であ る朱元璋(後の明太祖)は集 慶(現・南京)を根拠地とし て張士誠と争ったため、松 江府下は戦場と化したが、 至正 27 年 (1367 年) 朱元璋 が再度松江府城を占拠し府 内の政治的安定が実現した。

明洪武 30年(1397年)、 張士誠の城壁を基礎として、 松江府城周囲には煉瓦積の 城壁が築かれる。城の周囲 9里173歩(約4.7キロ)、 高1.8丈(約6メートル)、 城堀河幅10丈(約33メート ル)深さ 0.72 丈(約2.3 メートル)、陸門 4ヶ所、水門 4ヶ所、水門 4ヶ所、水門 4ヶ所、東門は披雲門、西門は谷陽門、南門は集仙門、北門は通波門と呼ばれた。城壁上には敌台(監視台)20座、窝铺(休憩所)26座、城垛(銃眼つきの胸壁)3369个が設置されるなど、このとき既に大規模な城郭を有していた。



■明代金山衛城南門

明初以来、松江府地域沿 岸にも倭寇が出現を始める。 嘉靖年間(1522~1566年)、 倭寇が大挙して沿岸部を犯 したため、松江府城をはじ め府下の上海県城、金山衛 城などでは急遽城壁や海防 施設を修築して倭寇の攻撃 に対抗した。

5、明代後中期から後期の 松府の発展

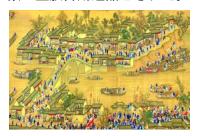
明代中期以降、松江府の 社会は新しい発展段階に入 る。主要商品としての綿布 の生産と販売、米などの国 内市場の流通中心地として、 松江府城、府下の镇、市は さらに成長を遂げることに なる。



■明代松江布帛市の風景

明代、松江府は江南地区 の重要な綿布取引市場となり、"小蘇州"とも呼ばれ た。毎日巨額の取引が行われ、明代の小説《金瓶梅》 等では当時松江での綿布販 売の情景が描写されており、 松江布の影響の大きさを伺 うことができる。

元代に始まる綿紡績業は 松江経済発展の基幹産業と して発展したが、このころ 松江府地域の大半の家庭で は、老若男女とも日夜 は、老若男女とも日らも市 は、おいそしみ、自らも市 場で綿布などの販売も行っ た。また、松江布の品質 た。また、ない、特に"丁娘 子布"は上等品とされ、多数の皇族御用達品とされた。



■明清代の松江府城の繁栄 図

松江の綿紡績業の発展は、 全国紡績業の中心地として、 府城の商工業と文化の繁栄 をもたらした。明末の《歴 年記》では、その様子を"池 郭虽小,名宦甚多,旗杆稠 密, 牌坊满路"(城郭は狭い が、官吏が多く、商店の幟 が所狭しと揚っており、牌 楼が(町の)至る処にある。) と記している。また無店の 数の商店は城郭外の四方に 拡大し、明代後期以降もこ の勢いは止まらなかった。 城廓外には商店、路地、民 居がひしめき合い街衢が縦 横に立ち並んだ。その中で も東、西両門は"系商贾辐 辏之地……而西尤三倍于 东"(商人が集まる地…… またその数は西が東の三倍 である), "商贾辐辏, 肩摩

穀击"(商人があちこちか ら(諸方から)集まり、その 往来に人の肩と肩がぶつか り、車のこしきどうしがぶ つかるほどであった)とも 表現された。さらに、西門 外秀野橋一帯は"贩齿革羽 毛, 冶凫鲍之工, 居肆以办 民器, 皆栉比于谷阳门外, 凡七八里,抵于仓城"(象牙、 獣皮、鳥獣の毛が売られ、 野生の鴨と塩漬けの魚が捌 かれ、盛り付け器物は豪奢 で、その賑わいは谷陽門外 おおよそ七八里(約350~ 450 メートル) の倉城まで 続く)と記された。

明代には松江府の繁栄を 形容して"苏松财赋半天 下"(蘇州府と松江府の財 貨と納税額は天下の半分を 占める)とも言われ、このと き松江府城は全国15の大 都市の一つとして数えられ ることとなった。



■雲間書院の風景

では、この時代松江府の 文化に関して、特に科挙の 側面から見てみましょう。 松江府は統計によると歴 史的に合計約500名もの進 士を輩出した全国でも教育 水準の高い地域であった進士、 明代では合計287名の進士り、 3名の状元を輩出しての地位 を得ている。また松田一の地存 には、九峰書院、西湖書院、 日新書院が、官吏の子弟などの ために開設された。



■董其昌

その中でも進士に及第後、高級官僚となった明代松江府出身の董其昌(1555~1636年)は、特に書画に優れた業績を残し、後世中国のみならず江戸時代の頼山陽など日本の文人たちにもその作風と思想は大きな影響を与え、「芸林百世の師」と尊ばれた。彼の絵画は特に松江派と呼ばれ、明代の停滞気味な絵画芸術を革新

していく。また、彼の書は 清朝においては康熙帝の敬 愛を受け、康熙 44 年 (1705 年) 及び 46 年 (1707 年) に帝 が松江を巡視した際に残し た墨跡の中で、董其昌祠堂 へ下賜した扁額の題詞は最 も文字が多かったとされて いる。

6. 清代以降の松江府と衰 退

明清の王朝交代の際、多 量の清軍兵が華北から南下 し、松江府城及び府下の多 数の城鎮では戦火の災害に 見舞われた。順治元年(1644 年)、清の将軍李棟成は軍を 率いて松江府城を陥れた後、 路上のいたるところに城民 の死体が横たわり、大通り や東西市場にはほとんど生 存者が残されなかったと伝 えられる。しかしながら、 清初の順治、康熙、雍正年 間(1644~1735年)には府 下の城镇の様子は変化し、 どの城镇も程度こそ違え城 民生活を回復した。松江府 城も順治、康熙年間以後は 徐々に繁栄を取り戻し、西

門外では昔日の街の喧騒と 繁栄が戻り、新たに"水道 陆衢,廛市殷阗,藩卫孔 亟"(水路、陸路も市場が急 速に繁栄し続けた)と当時 の様子が記されている。

一方で清代は松江府が繁 栄から衰退へと向かう時代 でもあった。その原因とし ては、以下の点が挙げられ る。

まず、米などの流通経路 が水運から海運へ移り変わ ったことである。康熙 23 年(1684年)、清朝政府は海 禁令を解除し、これを契機 に上海などの沿海貿易港が 南北洋上貿易の重要基地と して後の繁栄に至ることに なる。他方、米などの国内 流通市場の中心地としての 松江府は、その地位を他に 譲り渡すことになる。特に 明代から市河沿いに官へ納 める米の漕運倉庫が立ち並 んでいた倉城地区(現在の 松江倉城歴史文化風貌区) は清代末には衰退し、清咸 豊元年(1851年)の米の海 運開始に伴いその役割を終 えた。

次に、松江府経済の根幹 であった綿布業の衰退が挙 げられる。康熙年間(1662 ~1722年)、綿布の加工集 散地は徐々に蘇州へ移行し ていく。さらに 1840 年のア ヘン戦争後にイギリスと締 結された南京条約により、 上海、広州、福州など5港 が開港されたことを契機に、 外国資本が中国市場へ機械 製造の安価な綿布を多量に 輸入したため、府下の綿紡 績業は大きな打撃を受け、 その後急速に衰退へ向かう ことになる。



■松江府城内での洋槍隊の 訓練風景

さらに、道光二十九年 (1850年)に勃発した太平 天国の乱では、江南地域が 戦場となったことにより、 松江府地域及び府城の民生、 経済に深刻な荒廃をもたら したことが挙げられる。特 に松江府城では太平天国軍 と対峙する清朝側の外国人 傭兵部隊・洋槍隊(後の常勝 軍)との攻防が繰り返され、 城の荒廃ぶりは凄惨さを極 めた。

太平天国軍の江南地域占領時には内陸運河のよる交通が遮断され、そのため貿易の中心地は急速に上海へ移行した。また、戦時のため多くの外地住民が上海租界へ避難したことに伴い、そこに多量の資金が流れ込んだことも上海の急速な発展を後押しした。



■かつての松江府城水門(年 代不詳)

1911 年辛亥革命後、全国 で城壁を解体する風潮が起 こる中、松江府城の城壁も 1928 年から都市道路建設 の障害になるとして解体が 始まり、一部の護河を残し てほぼすべてが解体されて 今日に至っている。

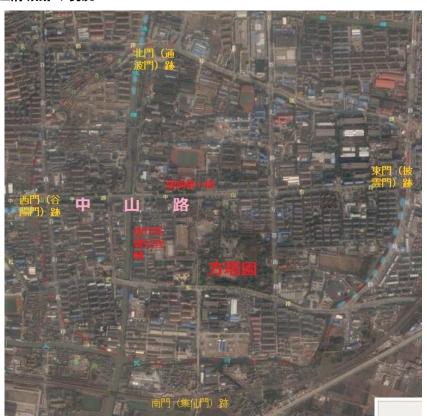
(本稿 文・東修平)

【引用文献】

網」

「図説上海 6000 年」
2010 年 10 月 上海世界書
局刊
インターネット「百度」「ウィキペディア」「松江文明

松江府城跡の現況



清代嘉慶年間(1796~1820年)の松江府城図を重ねたもの

